毒
毒
虫
II
IMAGE by PPK
Written by Doujimayu

毒虫2

1

「ねえ、こんなところで何やってくれるんだよ」と私が毒虫の尻を必死でつねろうとしたが、筋肉でかたいヤツの尻に私の爪は食い込まない。ムダに筋肉で武装している腐れホストだ。

「美術館でこういうことをやるのが、俺の少年の頃からの夢だったんだ」と毒虫が私の髪を撫でながら優しく微笑む。そしてニヤニヤ笑いながら、私のスカートの股間の辺りに熱っぽい視線を送ってきた。そこには今朝ヤツがホテルで仕込んだ、指の先っぽくらいの小さなローターがブブブというとても微弱だが不気味な音をたてて振動している。毒虫いわく一番弱いパワーに設定してあるらしいのだが、頭がくらくらするくらいの快楽が脊髄をつたって私の身体全体を支配する。やっぱり人間もただの動物ということで、快楽は痛みと同じくらい私たちを簡単に圧倒してしまうみたいだ。なんだか口のなかに唾液があふれてきて仕方がない。こんなんで、どうやって名画を鑑賞しろっていうんだ。

「印象派の画家はほとんどが生前は食えないやつらばっかりだったんだ」と彼は穏やかな秋の農村を描いた水彩画風のタッチで描かれた風景画を、惚れ惚れと眺めながら言った。

「そ、そうなんだ」と私はなるべく股間の中のローターから関心をそらすために毒虫の薀蓄に耳を傾ける。

「ゴッホも画商をやっていた弟のテオに面倒みてもらわなかったら、一切れのパンも食えない惨めな状態だったらしい」と言いながら、彼は一つの裸婦の絵の前に立ち止まりわざと私の手を握ってじっとしている。しかもただ手を握るのではなくて、意味不明に私の指と指の付け根を、まるでそこが手のヒラにある股間みたいにゆっくりと、繰り返し撫で続けるのだ。

「な、なんで……指をそんな風に触るの」と私は指からくる官能と股間からくる悦楽で涙目の半眼になりながら毒虫に訊ねた。

「甲斐の小さい可愛い手を見るとついさあ……ふふふ、何かしたくなるんだ」と毒虫は耳元に口を近づけて言った。

「ああ、も、もうなんか……お、オシッコしたくなる、トイレいきたいよ」と私は声を震わせて毒虫に懇願するが、やつは目の前の裸婦画像を指差しながら言った。

「もうちょっとのガマンだって。ほらこの裸婦のモデルも画家の前で何時間も色んなところを見つめられながらガマンしたんだよ」

「だから、私はただのガキなんだから、モデルじゃないから」

「ガキは庇護者の言う事を聞くもんだろ」と毒虫は髪をまた撫でながら耳元で囁く。

「や、やばいって、び、美術館でオシッコもらしたら……恥ずかしいよ、パパ」

「ははは、じゃあ仕方ないトイレいってきな」と毒虫は私のお尻をポンと叩いた。トイレでパンティを下ろしたら、透明な粘っこい液で光ったピンク色のローターが発掘された。それはなんだか

キラキラと宝石のように光る優雅なオブジェに見えたのは、私の頭が毒虫菌に犯されてしまった確実な証拠かもしれない。私はそれを丁寧にティッシュに包んでポケットにしまって不埒で変態プレイの好きな養父が待つ抽象画のコーナーに戻った。

「どうだった、名画の鑑賞は」と美術館の駐車場にとめてあるプリウスに戻って毒虫がニヤニヤ聞いてくる。

「ローターいれて絵画鑑賞なんかしてられっかよ」と私は顔を真っ赤にして毒虫を睨む。

「まだ、あれだろう。火照りが冷めないんじゃないか」

「……うん」

「エッチな娘をもつと、父親は大変だよ」と毒虫がため息をついて、私の胸を左手で優しく撫でる。

「……やだなあ、まだ股間に何か入っているみたいな感じがする」

「それはどっちかっていうと、何か入っているべきなのに、入ってないで変なんじゃないのかなあ」と毒虫は言いながら、私に濃厚な口付けをしてきた。旅先でもう誰に目撃されてもどうでもいいって感じ。

「うん、そうかもねパパ」と私は素直に自分の欲望を認めた。ガキの癖にやつの手なずけた発情ババアたちとどこが違うというのだろう。何も違いはしない。

「ラブホにいくか」

「でも、大丈夫かな」と、私は警察に捕まることを心配して言った。
「大丈夫だって、お前の身長とその大きなおっぱいがあれば、ガキ扱いする馬鹿はいないよ」と毒虫。
「でも、それでもやばくないかなあ」と私がぐずぐず言うと
「なにグズグズしているんだよ、一度きりの人生だぞ」
「パパの馬鹿、あんたがエンコウオヤジと間違えられて捕まるのが心配だからグズグズしているんじゃん」
「大丈夫、大丈夫、堂々としてやれば誰も気付かないって。甲斐はアダルトで妖艶だから」
「はあ、そうですかねえ」と私は毒虫の提案を受け入れることにした。ローターで火がついた身体は毒虫の毒針で冷まさないとパンティがまた濡れてきてしまうから。

「どうだ、結構気持ちいいだろう」と絵筆に生暖かいローションをつけて、毒虫が私の乳首を撫でている。ラブホテルの天井はご丁寧に鏡張りなので、毒虫にいたぶれる自分の姿がうんざりするくらいよく見える。

「そ、そんなものどこで用意したんだよお」と私は顔をしかめて言った。
「さっきの美術館で売ってたんだ、何かに役立つかと思ってね」と毒虫は今度は私のガキにしては大きいDカップのおっぱいの稜線を優しくなぞりながら答える。

「どうして、パパはそういう娘の裸にワインかけるとか、絵筆でいたずらするのが好きなんだろうねえ。本当は根暗なんじゃないの」と私が嫌味を言うと
「ただの交尾だったら動物でも出来るだろう。絵筆で乳房をなでるなんて行為は人間しか思いつかないじゃん。俺たちは猿じゃないんだ」と毒虫はいって、ローションの入った瓶を私の乳房からお腹にかけてテロテロと垂らしていく。
「き、気色悪いなあ……まったく」と私は特に気の聞いた感想もいえず私の身体に覆いかぶさる毒虫の喉仏を睨んだ。
「精液みたいで、興奮するだろう」
「……なんでそんなもんで興奮しなきゃならないんですか、わたくしが」と私は呆れて言った。
「ほら、いつもより乳首が大きくなっている。筆で撫でられるのが気持ちいいんだよな。これって上等のリスの尻尾の毛で作られた絵筆だってよ、二万円もしたんだ」
「に、二万円も払ってこんな馬鹿なことに使っているの、アホすぎだよパパ」
「でも娘の身体は父親にとっちゃあ宝物だからな。それなりの絵筆でないと」と毒虫は意味不明なことを言いながら、パンティを穿いたままの股間にもローションを垂らしていった。
「なんで脱がさないわけ」と私は不思議に思って聞いた。
「布地越しに圧を加えるほうが、より隠微な快感を送りこめると思ってね」と言う毒虫の顔は、ヒマワリを描いたゴッホにも恐らく負けない位に真剣な顔つきだった。その不埒で淫らな手はたっ

ぷりローションを染み込ませた絵筆を私の股間のもっとも敏感な肉の突起がある部分にググっと押し付けて上下に細かい震動を施していく。
「あ、うわあ、な、なんか、やばいよ」と思わず声をあげる馬鹿娘の私。
「俺の指より、ずっと繊細だろ、リスの毛」
「う、うん、リスの毛すごいね」とその物凄い効能には脱帽だった。
「高級素材だからな」
「あ、うわ、ああ、あ、うわあ、ああ」とリスの毛が上下に動くたびに声をあげてしまう。
「ふむ、もう布地から液体が溢れでてきたよ、甲斐さん。こういうのを浸透圧っていうんだ理化の時間で習わなかった？」と毒虫はサディスティックな嬌声をあげる。
「もう、さっさと入れてよ馬鹿」と私は涙目になって毒虫の大きくて横暴な毒針をリクエストする。
「いやあ、まだまだっすよ、もっとリスの毛の愛撫を楽しんでもらわないとね」と毒虫はせせら笑う。今度はうつ伏せにして、私の首の後ろを絵筆で擽るようになで始めた。
「ううひゃあ、あは、あはは、もうリス責めいいよ」
「順番間違えたなあ、周辺からやればよかった」と毒虫は私のけらけら笑う様子をみて残念そうに言った。

「なんか首はくすぐったいだけだね」と私は目の前の鏡に映る、毛筆を握った全裸の若い男に背面から圧し掛かられている裸の少女の姿を見ながら言った。

「やっぱり乳首とクリトリスが、リスの毛との相性抜群ってことだな。ユーザーレポートにそう書いとくよ」と毒虫は真面目な顔で私の透明な愛液で光っている毛筆を熱心に匂いをかいだりだり、自分の手で試してみたりしながら言った。

「馬鹿なこといってないで、やることやってよね、パパ」

「そうしよう。俺も実はもうガマンできないんだ」と毒虫は少年のようにはにかんで言った。